

第7回 日文研フォーラム

■
近代日本小説における女性像

Images of Women in Modern Japanese Fiction: Reality and Fantasy

—現実と幻想—

■
スーザン・ネイピア

Susan J. Napier

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 梅原猛

● テーマ ●
近代日本小説における女性像
－ 現実と幻想 －

Images of Women in Modern Japanese Fiction:
Reality and Fantasy

● 発表者 ●
スーザン・J・ネイピア
Susan J. Napier



発表者紹介

スーザン・J・ネイピア

Susan J. Napier

1955.10.11生

現職 テキサス大学助教授

ハーバード大学(東アジア研究専攻)を1977年に卒業後、1980年に同大学修士号(東アジア言語及び文明研究専攻)を、1984年に博士号をそれぞれ取得。1984-85年テキサス大学助教授、1985-86年プリンストン大学助教授、1986年から現職。

1980-81年にハーバード大学G S A Sメリット・フェローシップ授賞。1981-82年に国際交流基金奨学金を、1987年にテキサス大学で人文学研究奨学金をそれぞれ授賞。1987-88年、日米教育委員会(フルブライト・プログラム)奨学金で近代日本文学研究のために来日。

専門は近代日本文学で、主な論文に

"Review of Edwin McClellan's *Woman in the Crested Kimono*", Journal of Asian Studies, Summer, 1986

"Death and the Emperor: mishima, oe, and the Politics of Betrayal", Journal of Asian Studies, February, 1989

"The Painting, the Mirror, and the Chain: Images of Women in Modern Japanese Literature", Literature East and West (1989年出版予定)

などがある。

はじめに

本日は、国際日本文化研究センターの御招待を頂きまして、誠にありがとうございます。ございました。こちらの偉い先生方や、興味深いプログラムについて色々うかがっておりましたので、実際に参加させて頂く機会を得ましたのは、大変名誉なことには存じます。しかしこんなに難しい話題について話すように御依頼をうけたことは、単に名誉というより、私には荷が重すぎるのではないかと心配しております。皆さんのように御立派で、しかも日本人である方々の前で、私がアメリカ人として日本女性についてお話するのは、非常に僭越なことで、私にその資格があるかどうか自信がもてないでおります。実際、私が女性だということだけは確かですが、日本人ではないし、社会学者でもなく、ただの文学の専門家にすぎません。私は文学だけを研究しております、日本女性の現実の状態には詳しくありません。私の推論はあくまで文学に基いております。そのため非常に愚かな間違いを犯す危険性がありますが、その節はどうぞお許し下さい。しかし間違いを犯すとしても、文学を通して日本社会を見れば、少なくとも新鮮な見方、あるいはオリジナルな見方ができるのではないかと思えますので、せめてなるべくオリジナルな分析をするよう努力いたしたいと思えます。

幻想文学における女性

さて本題に入りますが、この話題を選んだのには、色々な理由といえますが、動機がありました。私は特に女性作家を研究しているわけではないのですが、数年前に、日本文学の中にBildungsromanというドイツ生まれの青春小説、あるいは教養小説のようなものがあるかどうかということに興味をおぼえました。Bildungsromanについてはあとでもっと詳しく説明いたしますが、今申し上げておきたいのは、私の考えでは、日本文学には二種類のBildungsromanがあるのではないということです。つまり男性を主人公としたものと女性を主人公にしたものです。Bildungsromanのことはかなり大きなトピックなので、しばらくわきに置いておきますが、私が今研究しているのは、幻想文学というちょっと変わったsubjectです。日本では幻想文学という色々な先入観があるようですので、ここでは英語のFantasyと言っておいた方が安全かもしれません。要するに、現実の世の中には有り得ないものはすべてFantasyです。いわゆるFantasy Literatureは一つの分野ですが、西洋でも日本でも、リアリズム作家だと定評のある人の作品の中にも、大変幻想的な小説が驚くほどたくさんあるので、特に日本文学では、現実と幻想はそれほど遠いものではないと思われれます。

そういうことを研究するために、去年の春から泉鏡花を読み始めました。皆さんもよく御存知のように、鏡花は幻想文学の大家ですが、それだけではなくて女性の描き方もすばらしいと思います。しかし鏡花は少し難解な作家ですから、コントラストとして、同時に筒井康隆の小説も読み始めました。そうすると、二人の作家の女性像が随分違うことにただちに気がつきました。おそらくそれはまず第一に、二人の作家自体の資質の違いから来たものと思いますが、更に他の作家達の作品を読みますと、やはりそれは戦前と戦後の作家の違いであるとも言えるだろうと思いました。しかしそれだけではないと思います。女性作家のものになると、幻想的な作品中の女性が非常に興味深い役割を果たしています。

このようなことを色々考えているうちに、これからお話するようなことを思いついたのです。話のタイトルが現実と幻想というふうに分けてありますので、まず現実の方から始めましょう。しかし現実と言っても、これは文学についての話で、世の中の Real World の現実ではありません。特に女性の描き方についてみると、たとえ Realistic Fiction と言っても、女性は割合に象徴的な役割を演じています。確かに日本近代文学には力強い印象を与える女性も登場して来ます。例えば谷崎潤一郎の『細雪』の幸子や三島由紀夫の『宴のあと』の主人公、大江健三

郎の『個人的な体験』の火見子などのような、かなりリアリスティックな女性像もあります。これらはむしろ例外的で、日本の現代文学全体を展望すると、大部分の女性は、男性と比べるとあまり深みや個性といった3 Dimensionality（三次元性）を感じさせません。

これは別に驚くべきことではないと思います。ブルム・ダイクスタラというUCLAの学者の“Idols of Perversity”という本には、十九世紀の英国作家の文学における女性の、いわゆる象徴性が細かく研究されていますが、ダイクスタラによりますと、ビクトリア時代の男性は工業化が進むにつれて神経衰弱になって来て、色々な不安や恐怖に襲われるようになったと言っています。その結果、彼らの文学で描かれる女性は、夢と悪夢を表わすFantasyとして、一つの対称的な役割を果たすようになります。一つは十九世紀的悩みからの一種の避難場所、あるいはオアシスという役割です。例えば漱石が愛したPre-Raphaelite（ラファエロ前派主義者）のように、工業化された醜い社会から逃避して、理想化した中世を描き出し、その中に美しく、神秘的な女性をはめ込みました。このように女性は避難場所として象徴される一方で、逆に、これもやはりFantasy文学におけるのと同じように、男性の心に潜んでいる恐怖も象徴します。資本主義や帝国主義の中心だ

ったビクトリア時代のイギリス文学には、皮膚の色が黒くて魔女のような力を持つ、男性にとってAlienのような女が、男の健全な精神や生活を脅かし、破滅に導いたりしています。他の例もたくさんありますが、私がここで強調しておきたいのは、これは西洋独特の傾向ではなくて、むしろ西洋化と工業化という二つの問題に同時に苦しんだ明治・大正の日本文学において、このような傾向がはるかに強いのではないかとということです。

漱石・谷崎・鏡花における女性

避難場所としての女性の例を、漱石の作品の中にもう少し詳しく見てみましょう。先に申しましたように、漱石はPre-Raphaeliteを好んだだけではなく、むしろPre-Raphaeliteの描いた女性を手本にして、自分の作品の中に同じような女性を沢山創り出しました。『幻の楯』のクララ、『草枕』のお那美、『明暗』の清子等、神秘的な美人を描き出しました。そうした美人たちはただPre-Raphaeliteの模倣ではなく、英国の女性と同じように、困難な近代社会に生きる男性の静穏なオアシスとなっています。静かで穏やかであることは大事なことです。

漱石の作品の中では、男性とは反対に女性は動かなければ動かないほど良いの

です。この男と女の基本的な違いが一番よく描かれている場面が、『三四郎』の中に見出されます。そこでは広田という年配の学者が夢を見るのですが、その夢の中に小さな女の子が出てきます。彼女と広田の出会いが非常に感動的で、象徴性の上でも大事ですから、少し長くなりますが、引用してみましよう。

夢だよ。……僕が何でも大きな森の中を歩いてゐる。……突然その女に逢つた。行き逢つたのではない。向かうはじつと立つてゐた。見ると昔の通りの顔をしてゐる。昔の通りの服装をしてゐる。髪も昔の髪である。つまり二十年前見た時と少しも変はらない十二、三の女である。僕がその女に、あなたは少しも変はらないといふと、その女は僕に大変年をお取りなすつたと言ふ。次に僕があなたはどうしてさう変はらずにゐるのかと聞くと、この顔の年、この服装の月、この髪の日が、一番好きだからかうしてゐると言ふ。それは何時の事かと聞くと、二十年前あなたにお目にかかつた時だと言ふ。それなら僕は、何故かう年を取つたんだらうと自分で不思議がると、女があなたはその時よりもつと美しい方へ方へとお移りなされたがるからだと言へてくれた。そのとき僕が女に、あなたは画だと言ふと女は僕にあなたは詩だと言

つた。

漱石の小説には、美しい画のように物体化された女性が随分出て来ます。彼女らは何も要求せず、ただじっと男の精神的進歩(Binding)を見守りながら、男性にとっては大変都合の良い役割を果たします。過去への憧れに満ちた主人公を慰めたり、励ましたりもします。

これらおおむね肯定的な役割をする漱石の作品中の女性に比べると、谷崎の作品に登場する女性はもっと個性的な役割を演じます。谷崎の作品中の男性の主人公にも過去への憧れを持っている人は少なくないのですが、その憧れと同時に、将来に対してのObsession(脅迫観念)とか恐れとかを持っている人物も、かなり多いと思います。『痴人の愛』の浮気なナオミ、『瘋癲老人日記』の欲張りな娘や『鍵』の恥知らずな主人公のように、西洋の魅力と欠点を兼ね備えた悪女がいっぱい出てきます。ビクトリア時代のイギリス文学に現れる肌の黒い女性とはちよほど逆に、西洋化された女性が男にいわば魔法をかけ、とりこにするのです。もちろん、谷崎の作品には、日本の女性であっても悪女はいますが、悪い女と言っても、西洋的女性に比べて、あまり積極的な悪は行いません。特に谷崎の一

番理想とする女性像、つまり谷崎の母親をイメージした人物は、たいてい男の望む通りの行動をします。例えば谷崎の名作を見てみますと、『夢の浮橋』は「母胎への回帰」としての構造を持っていると言えます。しかもこの母は、一個人の母というより、むしろ日本文化全体を守っている母を意味しているのは明らかです。この美しい憧れに満ちた小説には、『源氏物語』をはじめ、『新古今集』や能など、日本の古典文学の名作の多くが引用されています。小説の中心となっている『庭』も同様に、母の体内の象徴であって、一つの日本文化の表現として認めて良いと思います。谷崎の小説におけるこの近親相姦とでも言うべき関係は、一種のエディプス・コンプレックスの願望達成と言うこともできるでしょう。

『夢の浮橋』はFantasyに大変近い小説だと思えますが、本物の幻想文学では女性の取り扱いはどうなるでしょうか。泉鏡花の作品を見ると、一応は谷崎の取り扱い方とそんなに変わっていないと思われませんが、もう少し詳しく見ていくと、すぐに泉鏡花の女の方がずっと積極的で、恐ろしいということがわかって来ます。例えば『高野聖』を見ますと、谷崎も描いているような美しい神秘的な女が、暗い体内を思わせる谷間に現れます。この女は客であるお坊さんを親切にもてなしますが、同時に非常に誘惑的な態度を見せます。これも谷崎のものとはあまり変わ

りませんが、やがて彼女は男を動物に変えてしまうという、実に残酷な態度を示します。こうしたことは、谷崎の作品には見られない行動です。鏡花の女は、単に受身的に日本の伝統や習慣を象徴するだけでなく、女性は過去の日本が失望に満ちた現在に一種のむごたらしい復讐を与える手段として、非常に積極的な役割を果たしているのです。

藤本徳明が言うように、「鏡花文学にはしばしば古風で心やさしい美貌の女性の愛が成金の俗物的男性の金力や権力によって踏みこじられんとするテーマが描かれる。それは、力づくで成金の俗物利潤追求的な近代欧米的男性原理の受容を迫られんとした明治の日本の古風な女性原理の悲歌であったかも知れないのである。」しかし、鏡花の女性はいつも多様な受難の存在であったわけではありませぬ。『高野聖』の女だけが男を動物に変える魔力を持っていたのではなく、『夜叉ヶ池』の姫は彼女の力を信じない村人を洪水で苦しめますし、あるいは『天守物語』の姫は恋人を救おうとしてかなり積極的な行動をとります。鏡花の女は魔力によって現代に復讐しますが、その復讐も女自身もかなり肯定的に描かれています。しかしそうした女性においてもやはり、漱石や谷崎の作品中のもっとリアリスティックで伝統的な女主人公と同じように、日本の古い伝統を守るといふ象

徴的な役割が非常に重要なものなのです。

戦後文学における女性

戦後文学になると、特に幻想文学において女性の役割が大分変わって来ました。簡単に言えば、その変化は女性がほとんど母性を喪失したこと、時には全く女性が不在になるということです。その不在には色々な表われ方があります。例えば、安部公房の『密会』では妻は誘拐され、井上ひさしの『吉里吉里人』のベルゴ17という女性は、殺されて肉体を男性のために提供されますし、筒井康隆の『問題外科』の看護婦は犯されてついに殺されるなど、不具にされたり、変形されたり、あるいは全く消滅させられたりする女性の数が目立って増えて来ます。

その消滅させられた女性の中で一番面白い表われ方は、筒井康隆の『ポルノ惑星』におけるサルモネラ人間の不在の女だと思えます。この『ポルノ惑星』というSF的な話は、鏡花の『高野聖』ほど知られていませんが、意外に鏡花の名作と共通している点がありますので、もう少し詳しく比較すると面白いと思います。

両方ともエロティシズムに満ちた旅、あるいはQuest、つまり探索の構造をとっ

ています。それに両作品とも、エロティックで遠く隠れた一種の理想郷を描いています。その国では男性が変な動物に変えられてしまったりすることがよく起るので、主人公は最後に一種の悟りに達する結果になります。そのうえ『高野聖』では蛙や蛇が住んでいる林が、また『ポルノ惑星』では明らかに性的な「おっぱい太陽」とか「夜泣き山」等が背景になっています。

ところが、この二つの小説には一つの興味深い違いがあります。それは女の存在と不在ということです。先ほど述べましたように、『高野聖』の中心には美しくやさしい神秘的な女がいました。しかし『ポルノ惑星』の性にあふれた背景の前には、女性が一人も登場しません。一番女に近いものは、性別がないのに母の役割を果たしているクモのような動物です。そして小説のクライマックスでは一人の男性、最上川先生というかなり年配の科学者がそのクモに変わってしまいます。驚いたことに、最上川先生はその変化を嘆くどころか、むしろ喜んでいきます。やっと「性から開放された。うれしい、うれしい」と叫んでいる彼の姿が、小説の最後のイメージです。

筒井康隆の小説がかなりユーモラスに性的な問題を取り扱っているのに比べて、安部公房の『密会』という小説は性と女の間接的な関係を非常に暗く描いています。この

小説は、主人公の妻が或る日突然さらわれて、おそらく近くの大病院に閉じ込められたらしいという、ありそうもないような出来事から始まります。主人公も妻を探すために病院の中に入って行きますが、このQuest（探索）の形をしている小説にはハッピーエンドがありません。むしろ主人公が病院の内部に入って行くにつれて、ますます雰囲気が悪くなって行きます。やがて妻らしい女がやっと見つかりますが、この女性には仮面をかぶって、大きなベッドの上で大勢の男とSexをしています。最後は、主人公がその場から逃げ出して、病院の地下で一人ぼっちの生活を送ることになるという気味の悪い結末です。戦前の文学にも、谷崎の『母を恋ふる記』のように、女を探すという構造を持っている小説がありました。その中では、女を発見したことはハッピーエンドを意味し、安部公房の暗いビジョンとは全く違います。谷崎の小説では、老人が夢の中で幼い頃に戻り、悪夢のような景色の中を旅しながら、ついに若くて美しい母を見つけ出すのです。

ところで、母のイメージについて話しますと、最近の幻想文学では、母の描き方も大分変わって来ました。例えば『吉里吉里人』の主人公の母は、彼を呪っているとも言っている位に、いつもその息子にとって最悪の時に現れて、息子に屈辱を与えてしまうという、大変否定的な役割を果たします。他の幻想的小説で

は、母性がそれほど重要視されずに、母親としての生産性、つまり赤ちゃんを産むことが否定的に強調されています。例えば、安部公房の後期の作品で、主人公の妻が怪物のような赤ちゃんを産みますが、それも先に述べた『ボルノ惑星』の構造のきっかけになっています。つまり、ボルノ惑星に滞在している女性科学者が変なものを妊って、そのお腹の中の「何か」を中絶するために、Quest（探索）が始まったという構造なのです。

大江健三郎の最近の小説では、母とか一般の女性が割に肯定的な役割を果たします。例えば『洪水はわが魂に及び』の主人公のガールフレンドのいなごが、主人公の息子のじんを救って新しい未来の訪れを象徴していますが、初期の大江作品の女性は、たいいてい男の夢を破るという、随分否定的な行為をしています。大江の問題作『同時代ゲーム』でも、主人公の妹が大事な役割を果たすのにも関わらず、妹自身は作品の内に登場しません。

現代文学における女性の不在とか、否定的な描き方とかは、結局どういう意味をもつのでしょうか。戦後の日本人男性作家がみな急に女嫌いになったのでしょうか。そんなことはないと思います。もしかしたら、女性はもはや過去とか伝統とかを象徴することができなくなったと同時に、男性作家が西洋的文明による明

るい未来も信じられなくなったために、未来を象徴することも出来なくなったためではないかと考えられます。あえて言えば、日本の戦後の作家が、やっと自国の歴史と、明治時代以来公式に認められて来た文明開化のビジョンから、解放されたということかも知れません。この解放は一概に良いことだとは言えません。私が今まで述べた例から見ても、そこには寂しい暗い面もあります。

戦前の女性作家における女性

その暗い面をもっと理解するために、これから女流文学の方に少し触れてみましょう。女性作家の文学にも現実と幻想の違いがあるので、それを心にとめながら現実の方から始めましょう。

これも少し大袈裟な言い方かも知れませんが、明治以来の日本の女流文学には、女性としての一種の Identity Crisis (危機) というか、女性独特の Binding (進歩、教養) とでもいうようなパターンが発見できると思います。ところがこのパターンは、男性のような歴史と家から解放されるという Binding ではありません。漱石の『こゝろ』とか、藤村の『破壊』のような小説が描いた若い男性が、伝統にそむいてやっと自分のアイデンティティを見つけ出すのとは違って、女性の主

人公は、いくら家とか自分の過去にそむこうとしても、必ずと言っていい位、それに負けてしまいます。

例えば、樋口一葉の作品をちょっと取り上げてみます。一葉の『十三夜』という短編に、そのパターンがはっきり見られます。ある若い女性が、彼女に冷たい残酷な夫と一緒に暮すことが耐えられなくなって、実家に帰って来てしまいます。実家の親はある程度同情してはくれますが、絶対に彼女を家に泊めません。そして父親の説得によって、最後には夫の所に戻ることを承知します。そこで夫の家に戻るために人力車に乗りますが、偶然にもその車夫が彼女の前の恋人だったのです。しかし女は何も言わずに、諦めて夫の家に戻るという結末です。

ある面からみれば、一葉の主人公は一種のアイデンティティを見出したとも言えますが、それはどのようなアイデンティティでしょうか。彼女が見出したものは、女は一個の人間ではなくて、母であり、妻であり、娘であるということだったのです。私はこの小説の構造をCircular Chain「円を描いてもとに戻るくさり」というふうに名付けました。日本語に訳せば、「円形のくさり」ということになるでしょうが、英語のChainの方が色々なニュアンスをもっていますので、Chainという言葉のまま使った方がいいかも知れません。Chainという言葉が、どう

いう意味を表わすかと言いますと、やはり先ずChainの一番基本的な意味である、一つの物体 (Solidなもの) ではなくて、沢山の輪 (Links) で出来ているということです。

私を見るところでは、女はそのChainのLink (輪) の一つにすぎません。前のLinks (輪) は過去の象徴で、過去とは個人的なもの、つまり親や祖先への責任を意味し、ときには超個人的過去、つまり日本の社会への義務も意味します。後のLinks (輪) はやはり子供とか社会の将来への責任です。英語にはKarmic Chain、つまり因果という表現がありますが、先程の一葉の宿命観というか、諦めに満ちた小説には、このKarmic Chainの意識が潜んでいると思います。

円地文子の『女坂』という小説には、この因果ということがはっきりと書いてあります。円地文子の小説では、一葉の主人公と同じように、残酷な男と結婚した若い女が、その結婚から逃げようとして逃げられず、結局自分の人生を諦めてしまします。しかも彼女は、自分が自由ではなくて、くさりの一つの輪だということ、ちゃんとわかっているのです。しかし円地の主人公は、最後の望みとして、死んでからは絶対に夫の家族と一緒のお墓に埋めてもらいたくない、灰を海にばらまいて貰いたいという、苦しみに満ちた願いを遺します。ところが、彼女

が死んだ後、彼女の望みは何一つかなえられませんでした。彼女の願いは無視されてしまったのです。

英語の Chain には、もう一つのニュアンスがあります。それは囚人の為に使うくさりという意味です。女の側からみると、いくらそのくさりを断ち切ろうとしても、社会があまりに強すぎるために、最後には女性はいつも牢獄に戻されるといふことです。

戦後の女性作家における女性

今まで申しました例は、みな戦前に書かれたか、或は戦後に書かれても、戦前に行われていたことについての小説ですが、戦後のことになるとどう変わるでしょうか。驚くことに、私には戦後の小説にも Circular Chain がまだ見られるように思われます。その Circle は時々変な形を取りますが、まだまだ女性の個人的行動をばばんでいます。

例えば円地文子の『女面』では、非常に神秘的な姑が自分の娘と義理の娘を奇妙な目的のために利用します。その利用の原因となっているものは、死んだ息子とこれから産まれる孫のためで、過去と将来両者のためです。円地の作品が暗示

するように、女性作家の作品で一番重要な関係は、男女の間のことではなく、母と娘の闘いです。それに、谷崎とか鏡花の文学と比べると、母が非常に冷たい形を取ります。一葉の『十三夜』のように、娘が実家に戻ろうとしても、母親に拒絶されるというパターンが戦後文学にも続いています。

例えば津島佑子の『草の臥所』では、若い女が恋人と別れて家に戻ってきますが、母親は歓迎するどころか、娘を批判し、無視しようとします。『草の臥所』の一番痛切な場面は、先程の谷崎の『母を恋ふる記』の夢とよく似ています。津島の主人公は幼い時のことをよく覚えていますが、特に彼女がスーパーマーケットに行つて母親とはぐれてしまったという、怖い思い出を持っています。スーパーマーケットを隅から隅まで探しまわっても、母はなかなか見つからなかったのですが、最後にやっと母が現れます。しかし、谷崎の愛に満ちたハッピーエンドと違って、母はただ娘を強く叱り、黙ったまま家に帰ります。

母が単に冷たいだけでなく、時には積極的に娘を家から追い出そうとすることもあります。高橋たか子の『相似形』では、母が夫と息子と一緒に住むために、娘を家から追い出そうとします。

もちろん、くさりから解放されて個性的な人生を送っている例外もありますが、

女性作家のリアリズム文学では、その例外はまだまだ稀なように見えます。ところが幻想文学になりますと、くさりを断ち切って一人の女として生きるビジョンが驚くほど増えて来ます。しかしその一人ぼっちのイメージは、たいてい現実から離れたFantasyにすぎません。例えば、大庭みな子の『山姥の微笑』という非常に感動的な短編についてちょっとお話ししますと、「山姥」の一番興味を引く点は、そのファンタスティックなタイトルにも関わらず、話そのものは強く心に訴えるリアリスティックなものです。いわゆる「山姥」は、他人の気持や考えがわかるという超自然的な力を生まれつき持っています。その能力のために、いつも人の犠牲になってしまいます。例えば、山姥が年をとって死にそうになった時、自分の子供の「私達の迷惑だからお母さんに早く死んで欲しい」という気持がわかって、子供の希望に従って自殺するという場面があります。

『山姥の微笑』から二つの興味深い点を取り上げてみたいと思います。一つは、そのタイトルの反語的な皮肉です。この小説の主人公は、山姥どころかごく普通の人間なのですが、女性である以上、このような超人間的な力を持つのが当然だとされている点です。もう一つの興味深い点は、その主人公が抱くビジョン（幻覚）です。その幻覚は孤独に憧れているビジョンです。それは、実際に山姥とな

り、風が吹きすさぶ岩の上に裸で立っているという、かなり強烈な印象を与えるビジョンです。しかし、くさりの中の女である限り、そのビジョンが単なる幻覚にすぎないのだということが、読者にはすぐに分かるはずでです。

円地文子の『女面』の最後には、孤独のビジョンはないのですが、男性不在の特別な世界を暗示しています。円地や大庭の小説では、男性の不在は割合はつきりしない描き方がありますが、金井美恵子の『兎』というすばらしく純粹なFantasyでは、ヒロインが何の躊躇もなく、家族から、男性から、責任から解放された生活を追求しています。

『兎』は、語り手が突然大きくて白いうさぎに出会うという、神秘的な場面から始まります。近づいて見ると、それはただ兎の衣裳を来ている女性ですが、その女性の話がますます小説を幻想の世界へと導くのです。その女性の母と兄弟が或る日いつの間にか消えてしまいました。ところが彼女は驚きも嘆きもせず、平然として父と新しい生活を始めます。その生活はとても自由で、学校にも仕事にも行かず、ただ兎を育て、それを殺したり食べたりするという非常に単純なものになります。娘はこの生活に満足しているらしいのですが、或る日、今度は父が急に死んでしまい、全く一人きりの生活を始めることになります。その生活が

非常に兎に似てきて、兎を食べるだけでなく、衣服に兎の毛を使い、兎の毛と血で一杯の家に住んで、一人ぼっちの生活をします。話の終わりには、最初に現れた語り手も影響されて、兎のようになるかと決心するのです。

『兎』の気味の悪い、しかし新鮮なFantasyは色々な面から解釈できると思いますが。すぐ感じることは、谷崎のような一種のエディプス・コンプレックスのちょうど逆で、つまりエレクトラ・コンプレックスに他ならないということです。女の子の暗い夢のように、ライバルの母と兄弟がいなくなつて、愛する父と二人きりで自由で制約のない生活を送ることになります。

しかし話はそこで終わりません。終わりの方がずっと暗いのです。その最後に出てくる兎小屋のビジョンも色々な意味をもっているでしょうが、その一つは明らかに女性の体特有の場所のシンボル、即ち胎内、子宮だと思えます。けれども、その一番女性的で、しかも母性的なシンボルの中に、女は一人ぼっちで住んでいるのです。やはりいくら父を愛しても、やがては孤独に憧れ、『山姥の微笑』とか『女面』の女性と同じように、男性なしの世界の方に惹きつけられるのです。もしかすると、これは男性に対するだけでなく、つまりただ男嫌いの女性の復讐を意味するだけではなく、圧力が強すぎ、責任が重すぎ、くさりが多すぎて息

がつまりそんな社会全体への復讐の Fantasy なのかも知れません。

女性不在の意味

復讐のテーマは女流文学に限りません。日本文学では、男性が描いた女性のイメージと、女性作家が描いた女性のイメージには、意外に共通している点があります。簡単に言えば、戦後の男性作家の幻想文学における女性像はたまたま肯定的な描き方をされていきますが、それは困難と失望に満ちた社会からの避難場所となる女性ではなくて、むしろその失望に満ちた社会の重要な象徴になっているのではないのでしょうか。ですから、その女性殺害とか、女性不在とかは一種の男性側からの復讐だと思えます。女流文学では、女性の登場人物はたいいてい肯定的、または同情的に（少なくとも、被害者のように）描かれています。女性作家の幻想文学になりますと、その登場人物が被害者でもなく、いわゆる良い女でもなく、円地や大庭の小説におけるように、段々と力を持ち、普通の人間世界を超越した女になって行きます。しかし面白いことに男性女性作家両方とも、その作品の主人公の最後のビジョンは孤独です。その不在の原因は、時には男性がわざと殺害した場合もありますが、安部の『密会』のように、男性の責任ではなく、偶

然の出来事である場合が多いのです。女性の主人公が一人ぼっちになるのは、常にと言っている位、女性自身の選択によるものです。

最後にこの孤独な女性や男性が現代日本の Real World（現実世界）とどういう関係にあるか、考えてみたいと思います。皆様は私よりずっとご自分の社会にお詳しいのですから、もしかするとこの問題はおまかせした方がいいのかも知れません。しかし、私のような傍観者としての一外国人からの感想を申させていただきますならば、この孤独のイメージは現代日本社会の暗い面を反映していると思わずにはいられません。今までグループ意識が強いことで有名であった日本社会が、突然孤独に憧れているイメージでいっぱいになったということは、非常に興味のある傾向だと思います。女性から見れば、それはくさを断ち切り、個性的に生き始めたという証拠の一つでもあると言えるのではないのでしょうか。

長い間、私の話をお聞き下さいまして、本当に有難うございました。外国人でするので、皆様から御覧になれば、随分見当外れの意見を申し上げたかも知れませんが、ひょっとして、それがかえて日本社会の現在の状態、皆様は当然として疑問をお感じにならない男性や女性の立場などを見直すきっかけの一つになりましたら、大変嬉しいと存じます。今日はどうも有難うございました。

***** 発表を終えて *****

外国人の学者として、日本人の前で日本文学について発表することにはあまり自信がありませんでしたが、実際にやってみると、たいへん勉強になりました。聞き手のコメントや質問なども非常に興味深かったし、私と同時に参加して下さった上野千鶴子さんの意見にもいろいろと考えさせられました。フォーラムののんびりした形でさまざまな人々と楽しく意見を交換するチャンスが私に与えられたことを、たいへんありがたく思います。

Susan J. Napier

日文研フォーラム開催一覧

| 回 | 年月日 | 発表者・テーマ |
|---|----------|--|
| 1 | 62.10.12 | アレッサンドロ・バロータ（ピサ大学助教授） 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」 |
| 2 | 62.12.11 | エンゲルベルト・ヨリッセン（日文研客員助教授） 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」 |
| ③ | 63.2.19 | リー・A・トンプソン（大阪大学助手） 「大相撲の近代化」 |
| 4 | 63.4.19 | フォスコ・マライーニ（日文研客員教授） 「庭園に見る東西文明のちがひ」 |
| 5 | 63.6.14 | 宋 彙七（慶北大学校師範大学副教授） 「大塩平八郎研究の問題点」 |
| 6 | 63.8.9 | セップ・リンハルト（ウィーン大学教授） 「近世後期日本の遊び－拳を中心に－」 |
| ⑦ | 63.10.11 | スーザン・J・ネイピア（テキサス大学助教授） 「近代日本小説における女性像－現実と幻想－」 |
| 8 | 63.12.13 | ジェームズ・ドビンズ（オベリン大学助教授） 「仏教に生きた中世の女性－恵信尼の書簡－」 |

○は報告書既刊

非売品

発行日 1989年1月31日

編集発行 国際日本文化研究センター

京都市西京区大原野東境谷町2-5-9

電話(075)331-4101

問合先 国際日本文化研究センター

管理部・研究協力課

©1989 国際日本文化研究センター

■ 日時

1988年10月11日(火)

午後2時～4時

■ 場所

国際交流基金 京都支部

